

Sayonara: パッサウスポーツ青少年秋田訪問

心からのもてなしを受けた交流員—2005年8月には答礼訪問

文責: ロナルド・ツイーグラー

「もてなし、おおらかさ、まごころ、秋田で受けたこれらのことを、私たちは決して忘れない。」日本北部にある姉妹都市を訪れた第11回青少年スポーツ交流員は口をそろえてそう言う。パッサウおよび周辺地域のスポーツ青少年13名と引率者4名は3週間日本に滞在した。「信じられないぐらい素晴らしい経験だった。新しい友だちがたくさんでき、秋田で日常生活と日本文化をじっくりと堪能することができた。」1989年に始まったパッサウ体育協会と秋田市体育協会のこの交流プログラムはまたしても大成功を収めた。

茶道・弓道 — 本場で体験

「茶道」(ティーセレモニー)、「なぎなた」(槍の格闘技)、「弓道」(日本式弓矢)とはどういうものなのか、日本へ来る前に青少年たちは調べていた。それを2週間の秋田滞在中に本場でじっくりと体験することとなった。

「まるで国賓待遇を受けたかのようにだった。」ある交流員はそう語る。空港では国旗と横断幕での出迎えがあったし、ウェルカムパーティでは事前に練習してきた民族

ドイツ人親子も参加
○秋田市の青少年スポーツ交流事業で同市を訪れているドイツ・パッサウ市体育協会のロナルド・ツイーグラー団長(全)と息子のマティアス君(左)が、秋田銀行竿燈会の一員として竿燈デビューした。



二年前に同市を訪れたツイーグラー団長が、土産に竿燈の絵はがきを持ち帰ったところ、マティアス君が興味を持ち、今回は親子で来興。秋銀の協力で本番の参加が決まった。はんでん、たこ姿にさらしも巻いた本格的な姿に二人とも満足の様子。ぶっつけ本番ながら、マ

ティアス君が両手で幼互の若を上げると、周囲から大きな拍手が送られた。まっウ市から九十五

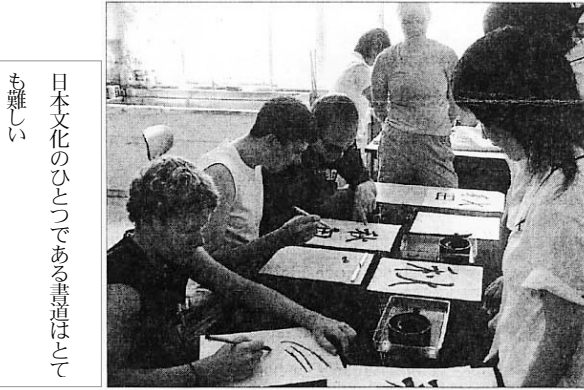
“秋田魁新報”に掲載：“秋田人”のマティアス・ツイーグラー、竿燈祭りにて

舞踊を披露するひまもないほど、ホストファミリーの方々が付きつきりとなってくれた。「だから、ぼくたちが秋田の人々と友だちになるのはあっという間のことだった。」グループのスポークスマンであるディーター・シュルターとシュテファン・ズィネックはそう語る。秋田市建都400年記念式典や姉妹都市20周年記念式典は、若者にとっては「たいくつな部類

に入るはずなのが、驚いたことに挨拶は少なくて短い上に、現代的表現舞踊から民族舞踊、民族音楽など、出し物がたくさんあったのだ。「これは自分たちにとっても模範になる。」と交流員たちは思った。旅のハイライトといえば有名な「竿燈祭り」であろう。特に最年少交流員のマティアス・ツイーグラーにとっては思い出深い。彼は秋田銀行竿燈会に「秋田人」とし



パッサウと秋田の青少年が駒ヶ岳で一緒に登山



日本文化のひとつである書道はとても難しい

ての参加を許され、大通りで竿燈を上げた。この模様をカメラマンに撮らえられ、翌日の地元新聞に掲載された。

友好親善の手段としてのスポーツ

多大な感謝を捧げるのはなんといってもホストファミリーだ。「ホストファミリーの皆さんは、私たちをお客ではなく、家族の一員として扱ってくれた。どのようにして彼らの生活の中に我々を溶け込

ませてくれたのか、それはもう、言葉にできないくらいだ。」この交流でもっとも重要なことは、短すぎる期間の中でいかに真の友情を築くかにある。「さよならパーティでは抱き合ったその手を離すことができなかった。」

日本人の流した涙はパッサウ人の目をも乾かすことがなかった。「我々の友人とホストファミリーは、空港の屋上でもずっと手を振ってくれていた。飛行機が離陸してからもずっと。」そう語るのはディーター・シュルター。パッサウ交流員のほとんどが5日間の東京滞在を止めてもっと秋田にいれたらいいのにと考えたほどだ。

誇りというものなしに、この青少年スポーツ交流の組織は15年も続かない。「我々のコンセプトは、友好親善の手段として共にスポーツをすることであり、そして今回もまた成功を収めた。」と、秋田市体育協会およびパッサウ体育協会の責任者の間で意見の一致をみた。そしてそれは今後も続き、来年8月に日本の友がパッサウを訪問する際にも繰り返されるであろう。

(翻訳: 石黒こずえ)